

## 平成 19 年度 受賞者

高円宮殿下記念地域伝統芸能賞

阿波おどり振興協会・徳島県阿波踊り協会（徳島県徳島市）

地域伝統芸能大賞 保存継承賞（第 1 類）：地域伝統芸能の実演に係わる団体又は個人

柏崎市綾子舞保存振興会（新潟県柏崎市）

地域伝統芸能大賞 活用賞（第 2 類）：地域伝統芸能を活用した行事の実施主体

加賀百万石まつり実行委員会（石川県金沢市）

地域伝統芸能大賞 支援賞（第 3 類）：衣装、用具等の製作、人材等の確保に係わる団体又は個人

梶原 一龍（佐賀県鹿島市）

地域伝統芸能大賞 地域振興賞（第 4 類）：その他特に顕著な貢献のあったもの

牛深ハイヤまつり実行委員会（熊本県天草市）

地域伝統芸能奨励賞

一字川 耕士（島根県安来市）

## 受賞者 プロフィール

高円宮殿下記念地域伝統芸能賞

阿波おどり振興協会・徳島県阿波踊り協会（徳島県徳島市）



約 400 年の歴史があり、徳島県内各地の市町村で開催される盆踊り。なかでも徳島市の阿波踊りが県内最大規模で最も有名であり、四国三大祭り、日本三大盆踊り、世界三大ダンスの一つに数えられている。この徳島市の阿波踊りは、毎年 8 月 12 日から 15 日までの四日間開催され観光客は 100 万人以上、踊り手だけでも 10 万人以上に達し、三味線、太鼓、鉦、横笛などの二拍子の伴奏にのって、女性は優雅に、男性は腰を落として豪快に踊る。

精霊踊りや念仏踊りが原型といわれているが起源は明らかではない。

一説には徳島城が竣工したさい、当時の阿波守蜂須賀家政が城下に「城の完成祝いとして、好きに踊れ」という触れを出したのが始まりという説もある。

地域伝統芸能大賞 保存継承賞（第 1 類）：地域伝統芸能の実演に係わる団体又は個人

柏崎市綾子舞保存振興会（新潟県柏崎市）



綾子舞は、女性が踊る小歌踊と男性による囃子舞、狂言の三種類の芸能を総称したもので、初期歌舞伎踊りの面影を色濃く残している。

確かな由来は解らないが、言い伝えでは 1509 年、越後守護上杉房能の奥方綾子が伝えたとする説や、京都北野神社の巫女文子のマイを伝えたとする説があるが、1600 年前後京都を中心に活躍していた出雲の阿国たちの初期歌舞伎踊りの舞台と同じであることから、この時代に伝承されたとかんがえられている。

芸能史上その価値が極めて高いと認められ、昭和 51 年に国の重要無形民俗文化財に指定された。

地域伝統芸能大賞 活用賞（第 2 類）：地域伝統芸能を活用した行事の実施主体

加賀百万石まつり実行委員会（石川県金沢市）



加賀百万石行列が行われる金沢百万石まつりは、加賀藩祖前田利家公が天正 11 年（1583 年）6 月 14 日、金沢に入城し、金沢の礎を築いた偉業を偲んで開催されている。昭和 27 年に金沢市と金沢商工会義所が中心となって開催した商工まつりが第 1 回目となり、その後豪華絢爛な百万石行列をはじめ、400 年に渡って受け継がれてきた金沢ならではの伝統ある行事が賑やかに繰り広げられてきた。

第 33 回目を迎えた昭和 59 年、初めて百万石行列の主役である利家役に俳優を起用して以降、全国に発信できる初夏の一大イベントに成長し、現在では 30 万人以上の動員を誇っている。

「加賀とびはしご登り」は、江戸時代、江戸幕府が江戸の大名火消しの組織を作るように命じたのを受けて、加賀藩の 5 代藩主綱紀が、江戸本郷上屋敷にあった防火隊の規模を大きくして作った消防組織「加賀とび」に始まり、「加賀とび」は目立つ服装といせいの良さ、見事な火消し活動で、江戸の名物となった。

「加賀とびはしご登り」は、火事のときに高いところからまわりの状況を見回し、消火活動を助けたのが始まりで、明治時代になって江戸の藩屋敷にいた、「加賀とび」38 人が金沢にうつり住み、「加賀とび」の技が今日に伝えられることとなった。金沢市では、「加賀とびはしご登り」の歴史や技を学ぶ場として、小学校 3 年生から 6 年生を対象に、金沢子どもはしご登り教室も開かれている。

**梶原 一龍（佐賀県鹿島市）**



鬼面に太鼓、シャグマを揺らして勇壮に舞い踊る面浮立は佐賀県を代表する地域伝統芸能である。面浮立の起こりについては戦の中で奇襲に鬼面を被ったのが始まりとの言い伝えがあるが、現在は五穀豊穡への感謝をこめて各地の神社に奉納されている。

「面浮立」の面は鬼だが、この鬼は決して人に害を及ぼすことはなく、むしろ人の生活を守り、悪霊を退治する鬼として昔より民衆に親しまれ、大切に扱われてきた。

梶原氏は「面浮立」で使われる鬼の面の制作者。高校を出てから父に弟子入り、三代目を襲名し、以来45年間、浮立面作り一筋。

**牛深ハイヤまつり実行委員会（熊本県天草市）**



牛深ハイヤ節は江戸時代後期に生まれたといわれ、当時の舶乗りたちによって全国に伝えられた。九州ではハイヤ節、東北・北海道ではアイヤ節、宮城県や茨城県では甚句と呼ばれている唄の源流である。ハイヤとは、九州地方で南風のことを「ハエ」と呼ぶことから、ハエがハエヤ、ハエヤがハイヤとなったもの。南風で出航した船が、どこの港まで進んだのだろうかという船乗りたちの身を案じる牛深の人々が歌い始めたといわれている。

**一字川 耕士（島根県安来市）**



平成19年度地域伝統芸能奨励賞受賞者の一字川耕士氏は、若い世代の安来節離れが進む中、高校卒業後、安来節保存会に入会。家業の安来節屋（体験道場・菓子製造業）を手伝いながら、全国的に難しいといわれる安来節（唄・絃・鼓・踊）をマスターし、地元はもとより全国各地で行われるイベント等に父親とともに出演し、普及・宣伝に努めている。安来節は島根県の代表的な民謡で、「どじょうすくいの唄」としても全国的に広く親しまれている。安来市は古くから鉄や米の積出港として栄え、元禄の頃に北前舟の船頭達によって、全国の追分、おけさなど民謡や田植え唄、船歌などが盛んに交流し、その中で「安来節」が誕生したと言われている。